

### 大学英語教材としての英字新聞

松浦, 明

---

(出版者 / Publisher)

法政大学小金井論集編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学小金井論集 / 法政大学小金井論集

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

155

(終了ページ / End Page)

161

(発行年 / Year)

2008-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003284>

# 大学英語教材としての英字新聞

松 浦 明

## はじめに

私は長い間 NIE（教育に新聞を）の取り組みを高等学校と大学でおこなってきいて英字新聞が教材としてさまざまな点ですぐれていることを実感してきた。折しも 2007 年 3 月に工学部の英語の専任の先生方から実践報告を英語担当教員連絡会議の席上でおこなうよう要請され、「英字新聞を使った授業」と題してささやかな報告をさせていただく機会に恵まれた。2006 年度の授業で使った記事を示しながらの報告であったが、私が話し終えるやいなや出席された先生方からの質問や意見がひきもきらず、うれしい悲鳴をあげるほどだった。そのあと専任の先生方からそれについて『小金井論集』に書くよう求められ、ここに私の NIE の教育実践をまとめることにしたのである。私は高等学校の専任教員として英語を教えるかたわら 1969 年度からこの小金井キャンパスで英語を担当させていただくことになり、2007 年度まで 39 年間それを大過なくつづけることができた。これまでに私が受けた多くのご好意にまず感謝の気持ちをあらわしておきたい。

## これまでの NIE 活動

本論にはいる前に私がこれまで取り組んできた NIE に関する活動について簡単にふれておきたい。

実は、私は小学生のころから新聞というものに興味をもち、同級生と学級新聞の編集、作成にかかわった経験がある。大学生のころに英字新聞を読みはじめていたのでそのつきあいは長い。

最初に私が英字新聞を使うようになったのは高等学校の選択講座であった。最

初のうちは週刊英字新聞を使ったこともあるが、やがて授業は私とその都度作るプリント教材を中心に進められることになる。日刊英字新聞を使った記憶はほとんどない。講座を受講している生徒を引率して新聞社を訪れ英字新聞が作られる過程を見学させた思い出が忘れられない。大学で英語教材として英字新聞を利用するようになるのは高校よりもあとのことだが、高校とちがって教材はもっぱら日刊英字新聞であり、プリントはほとんど作ったことがない。高校生と大学生では語彙力、読解力などの差もさることながら、視野の範囲が比較にならないほどちがうからである。

授業以外にも NIE の経験は多岐にわたりその年数も長い。講演や発表のほか、授業参観をしてもらったり執筆活動もずいぶんさせていただいた。NIE の研究会に所属してその役員をつとめ、催しの企画や開催、本の編集や執筆などに深くかかわり、多くの学校の教師との交わりから数多くのことを学んだ。

## 英字新聞を使う目的

私が大学の英語教材として英字新聞を使う目的はいくつかある。

その第一は、当然のことながら時事英語教材でなければなしえないこと、すなわち、現に日本国内や世界のさまざまな国、そして世界全体で起こっている事柄についての記事を学生がしっかりと読み、考え、自分の意見をもつことである。単に記事の内容を表面的にとらえるのではなく自分とのかかわりについて考えるということである。

私は英字新聞の授業の最初の時間に、英字新聞を使うのは君たちに専門バカになってほしくないからだと強調する。いくら専門の学問にすぐれていても、それと自分やそれをとりまく社会のさまざまな現象との関係に無関心でいていいのだろうかと疑問をなげかける。学生のふだんの熱心な授業態度からみて、私のいいたいことを理解しているように思える。

私が使ってきたヘラルド・アサヒという英字新聞は学生に複眼的思考を身につけさせるにはもってこいの教材である。ますます国際化していく日本という国をいわばそとからみられるようになることは学生にとって有意義であるにちがいない。これを端的に教材化するには、日本で起きた事件や事故などを同じ日のヘラルドとアサヒでどのように扱っているかをくらべさせるだけで十分である。実際

にこのような記事を取りあげたことがある。皇室や相撲のような日本文化に関する記事も効果的といってよい。

語学的な力を身につけさせるという点で私がかつても重視しているのが速読であり、短い時間で見出しや写真、グラフ、数字などを参考にしながら記事全体やパラグラフの大意をつかむ練習が授業の中心となる。

これらのことを念頭におきながら私自身が毎回いろいろな記事をえらぶのであるが、この際配慮すべきことは、記事の内容がかたよらないようにすること、学生の学力レベルの差を考慮し、やさしい記事、むずかしい記事などレベルのちがったものを用意することであり、私が学生に課す問題も短時間で大意把握ができるようになるものを中心に、記事の流れやパラグラフ同士の関係、数字の表わす意味など各種問題を準備する。学生がどのように私の作った問題に答えるのかを頭にうかべつつ記事をえらび、それに関した問題を作っていく作業は、手間と時間がかかりはするが、たのしいものである。やりだしたらやめられない類のものである。

私が2007年度に担当した総合英語(2年)は以上のべたようなかたちで授業が進められるが、科学英語補講と英語読解(1年)については英字新聞はあくまでも主たる教材(前者は「総合教材:科学の基礎を英語で読む」(英宝社)後者は*INDEPENDENT READER*(マクミラン ランゲージハウス))の補助教材として使う。そして前者の場合は科学の記事が多く後者ではテキストで学んだことの応用の意味あいが強くなる。天気予報やベストセラーの数字の読みとりがその例であり、skimming, scanningの練習に英字新聞はナマの教材として学生の知的好奇心を刺激したようだ。科学英語補講の試験に短い科学記事の要約を出題したが、それが好成績なのも英字新聞を使った成果と考えられる。

## 教 材 論

次に時事英語の大学教材を論じる。

英文学科の純文学教材や英語学科の英語学関係の教材は経済学や法学などの教材と同じで選択の幅があまりない。しかし、こと教養のための大学英語教材となると、その幅はおそろしいほど広く、よほど教員の側が学生に何を教えるかについての理念をもっていないと決めることができないほどである。たとえ日本文化

論や日米文化の比較論などテーマをしぼってみてもそれでも数多くの教材の中から1つをえらびだすことは至難の技といえる。

私は大学の英語教材というものは、一番すぐれたものが存在することはありえず、ちょうど食事がいろいろな食品が組み合わせられてこそバランスのとれた、健康によいものができるように、大学の英語教材もある教材が最適というのではなく、その他の教材と組み合わせられてその真価を発揮すると考えている。

時事英語教材の活用法はすでにのべたが、以下にその形態の比較を試みる。それは大きくわけて英字新聞そのものとそれ以外の教材（テキスト、プリントなど）の2つあり、テキストにはテープやDVDなどの補助教材がついている場合が多い。プリント教材は新聞を切り抜いて印刷する場合とインターネットのニュースをプリントアウトして印刷する場合がある。これらの教材を適切に組み合わせれば授業効果をあげることが期待できよう。

このうち私がテキスト教材を使わない理由を説明する。なんとといってもニュースが古いことが致命的である。どんなにすぐれた注や練習問題や補助教材が使ってもニュースの古さをカバーすることはできないと私は考える。1年前のニュースを学生に読ませるといえるのでは時事英語という名前が泣く。そこから学生が新鮮な驚きも感動も得ることはできまい。

ひるがえって紙の新聞がすぐれている点をいくつかあげてみよう。ニュースが新しいことは当然のこととして、パソコンから得られるニュースとくらべてすぐれている点は、①いつでもどこでも手軽に読めること、②新聞をひろげると一目でその日の大事なニュースが何か分かること、③記事に取りあげられている問題をじっくり読んで考えを深めることができること、などとなる。学生が何の抵抗もなく紙の新聞を真剣に読んでいく姿は感動的でさえある。

このIT時代に紙の新聞を使う授業はもう若者たちには見向きもされないのではないかと、私は2007年4月の初めての授業に行く前にふと不安になった。この工学部の総合英語の受講者数は例年と大差なかったものの、もう1つの大学の外国語学部英語学科の新聞英語の授業では大きな変化がみられ私をおどろかせた。2006年度の約4倍の学生がおしよせたのである。ああ、まだ紙の新聞は死んでいないと私は内心うれしかった。

## 授業の流れ

総合英語の授業についてのみ説明する。原則として新聞は1回の授業で使うが、2回にわたって使うこともある。授業の初めに私が新聞をくばったあと、その日に読む記事を指定し、それぞれの記事について私が作った問題を口頭で伝える。そのあと20～30分時間を与え、自分のやりたい記事に自由に取り組みさせる。時間がくると学生が前に出てきて答えを板書することになるのであるが、ここで大事なことは一切指名しないということである。どの記事をえらぶかはすべて学生の自由意志にまかされる。他の学生と重なってもかまわない。複数の学生の答えを比較させることには教育的な意義があり、どの答えが正しいかを考えさせると学生は興味を示す。

60分の試験は参照一切不可ですべて応用問題である。かならず自分の意見を英語で書かせる問題を出しているが、ここで学生の読解力と自己表現力がためされる。ふだんの意欲的な態度を反映して成績は良好である。

## 授業で取りあげた記事

2007年度の後期の授業で取りあげた記事の具体例を示し、あわせてなぜそれらをえらんだのかの理由を説明したい。

本のかたちの時事英語テキストではなしえない英字新聞の速報性を痛切に感じさせられたのが京都大学の万能細胞についての記事であった。さっそくこれを授業で取りあげるにより、学生に科学の進歩を実感させることができた。科学の記事は常に積極的に読ませているが、この記事は科学の最先端を物語るものであった。

今の学生は新聞を読まず政治には無関心といわれることがあるが、安倍首相から福田首相へと日本の政治が大きく変化したときにこれに関する記事を扱ったときにも学生の熱意はふだんとまったく変わらずたのもしかぎりであった。このことについて *TIME* の取りあげかたを授業でみせたことも学生の関心を高めるのに役立ったようだ。

科学技術と人間のかかわりはこの授業の1つの大きなテーマである。ロボットがこれまでのように人間にとって危険な仕事を引きうけるという役割だけでな

く、日本が高齢化社会に移っていくという流れの中で介護などの仕事にもたずさわらようになってきているという記事を取りあげ、科学技術が人間社会の状況の変化と切っても切れない関係にあることを考えさせた。もう1つは今話題のハイブリッド車である。この環境にやさしい車は音をほとんど出さないことが燃料についてのすぐれた性能とならんでその特色になっているとのことであるが、ヘラルドの記事によれば、視覚障害者にはこれが危険な要素になるというのである。私はこの記事で、すぐれた科学技術も弱い立場にある人の目線から見るとむしろマイナスになることもありうるということを学生に考えさせたかった。人間の優しさの大切さを学ばせたかった。

地球の温暖化は現在の世界の大きな問題であり、授業でも試験でもしばしば取りあげてきたが、ここでは日本のマス・メディアがあまり報道してこなかった事柄を授業で読ませた例を3つ紹介する。さすがにこのような記事への学生の関心は高い。1つはアメリカの元副大統領アル・ゴア氏があれほどこの問題に熱心に活動してきたのに、ノーベル平和賞を受けに行くのにジェット機を利用したことの是非を問う紙上討論、北極海の氷がとけて船が通れるようになった地域で海底資源をめぐる領有権の問題が浮上してきたという記事、そして温暖化がさまざまな分野に影響を及ぼしつつあって旅行業・観光業も例外ではないという記事である。

フランスのきびしい雇用問題の記事は、これから社会に出てはたらくことになる学生にとって1つの参考になったと思われる。

私がびっくりさせられたのは定年退職後のお年よりのうつの問題を取りあげたときの学生の反応である。学生にとってはずっと先の話だからほとんど関心を示さないのではないかと思っていたところ、私の予測ははずれた。私がこの記事をえらんだのは、単にお年よりの問題に限定するのではなく、その人の現在の年齢に関係なくいずれ年老いれば直面するかもしれない人間の生き方の問題として学生に考えてもらいたかったからである。学生は他の記事のときとなんら変わることなく懸命に取り組んでいた姿が印象的であった。

## おわりに

以上2007年度の授業実践を例に引きながら英字新聞の大学英語教材としての価値を論じてきたが、最近の世の中の動きをみるにつけますます時事問題の重要

性が増してきたと思わざるをえない。

私は普段の授業で、いくら科学技術が発達しても所詮それを利用するのは人間であり、その人間がそれを正しく利用できなければなんの役にも立たないばかりか害を及ぼすことさえありうるとのべてきた。イージス艦の衝突事故しかりである。私はまた、授業において、農業は国の産業の中心をなすものなのに日本の食糧自給率の低いことを憂い、これを改善すべきだと訴えてきた。はたして、中国にかかわるギョーザ毒物混入事件はこの日本の弱点をあますところなくさらけだした。これは日本という国の根幹をゆるがすゆゆしき問題である。そしてもう1つ、私は最後の授業でアメリカ大統領選挙にむけての民主党の予備選挙におけるオバマ候補の健闘ぶりに言及し、もしかするとアメリカ史上初の黒人大統領がうまれるかもしれないとのべ、これまで不可能、ありえないと考えられてきたことが起こりうることを強調した。これからの成り行きに目がはなせない状況である。これらのことが2008年度の授業で取りあげられないのは残念だがやむをえない。

私のこの小論がこれまでお世話になった英語科の先生方にすこしでもお役に立てばうれしい。私にこのような貴重な機会を与えてくださった川成先生はじめ英語科の専任の先生方に心から感謝したい。